

海を渡った女性記者・加納ユカシに関する考察

―『台湾愛国婦人』時代を中心に―

下岡友加（広島大学）

【概要】加納ユカシは愛国婦人会台湾支部機関誌『台湾愛国婦人』に署名入りの記事・作品を最も多く誌面に寄せた女性記者（作家）である。様々な媒体を渡り歩いた彼女の執筆活動は30年に渡るが、本発表では『台湾愛国婦人』時代（1909-1916）の作品に着目し、その特徴を明らかにした。ユカシは小説を連載する一方、台湾在住者として多くの見聞記をあらわした。すなわち、彼女は官製プロパガンダ誌であるとともに文芸雑誌の貌を持ち、さらには在台日本人の寄稿の場としても機能した『台湾愛国婦人』の複合的性格のいづれにも関わる重要な記者の一人であったと位置づけられる。

【キーワード】加納ユカシ、女性記者、女性雑誌、『台湾愛国婦人』、日本統治初期台湾

はじめに

加納ユカシ（筆名：幽閑子、ゆかし女）の履歴については、1909年1月から1913年7月まで愛国婦人会台湾支部事務員（後囑託）として雇用されていること以外、ほぼ不明である（1）。しかし、彼女には台湾へ渡る以前に『時代思潮』『東京二六新聞』『少女界』『家庭雑誌』への寄稿が、さらに台湾から再び〈内地〉へ戻った後にも『婦人世界』『我が家』『家の光』への寄稿が確認できる。すなわち、少なくとも1906年から1935年まで30年に渡る寄稿が確認されるのであり、現在では全くの無名の人物ではあるものの、明治生まれの女性としてはかなり息の長い執筆活動を行った書き手と言えよう。

ユカシの執筆内容は少女小説、詩、小説、訪問記、実用記事、お伽噺、脚本、雑録、伝記と幅広いジャンルに渡るが、本発表では特に『台湾愛国婦人』（2）時代を中心に彼女の活動を明らかにする。

一 文芸創作について

現在確認できる『台湾愛国婦人』へのユカシの最初の寄稿は、少女小説「由美子」（第9巻～第15巻、1909.8～1910.2。ただし、第10巻は未発見巻のため、前編三～五章は未見）である。内容は東京の裕福な家庭で育った少女・山川由美子が父の事業失敗により、母の里である京都近郊の家へ祖母とともに預けられ、そこで皆に心配をかけぬよう気を配り、健気に暮らしていくというものである。由美子は東京の学校で「世にも美しい模範生」（第12巻、90頁）として教師の覚えもめでたい生徒であったが、預けられた瀬良家においても「同情のある勉強家の実には立派な、真の女らしい子供」（第15巻、89頁）と評価される。由美子の善良な性質は瀬良家の一つ年上の松枝にもよい影響を与え、正月に帰省した京都大学在学中の松枝の兄の目にもとまる。瀬良家のおばあさんが「何と云っても由美子は瀬良家の人にならねばならぬ」（第15巻、89頁）と考えるところで小説は閉じられている。少女が味わう零落の悲哀を描くとともに、彼女の賢さゆえに報われるであろう未来が暗示されており、明治期の典型的な「少女不幸物語」「教訓物語」（菅聡子（3））としてそつのない出来である。まだ文芸作品の乏しかった初期『台湾愛国婦人』誌上において、穏当な読み

物を読者に提供したものと言える。

続いて、「作者が瀕死の病中に在つて一気筆を呵せる」「三百枚以上の長篇」（『編輯局より』第 35 卷、1911.10、146 頁）と誌上でも紹介されているユカシの小説「女教師」（第 35 卷～第 49 卷、1911.10～1912.12）の内容は次の通りである。「才色兼備つたら貴女の事よ」（第 41 卷、120 頁）と同僚に言われるような森静子は、尋常小学校四年の女兒を受け持つ新米教師である。しかし、『女学校出の無経験者、』であり乍ら多い俸給を貪る憎らしい人」（第 36 卷、115 頁）として、「生徒からは『森先生、森先生』と慕はれたけれども年寄つた女教員達には猜疑と憎悪の標的とな」（第 36 卷、112 頁）る。身に覚えのない艶聞を新聞に投書された静子は、それを機に学校を辞め、一緒に暮らしていた脚の不自由な妹・百合子とも別れて、商家の住み込み家庭教師となるまでが描かれている。静子の実家は元々東京で相当な暮らしをしていたが、父の事業失敗により零落した点、女性主人公が周囲の嫉妬を買うような優等生である点、彼女を思う好青年が登場する点、すべて先の少女小説「由美子」と共通する設定である。そのなかで本小説の読みどころは、教師生活の具体を描き込んでいることにある。たとえば、職員室での教師たちの会話に『よせよ。さもしい話は。ハイカラな服装がしたいのも美しい食が喰ひたいのも人間であつて見れば教員だつて同じさ。平田東助閣下だつてまさか二十円未満の月給の中で七円も八円も貯金しろと云やしまいし、いつも／＼鰯の干物ばかり喰つてた日にや鰯よりも人間の干物が出来上つちまはあ。』（第 47 卷、108 頁）という一節がある。この会話は 1908 年第二次桂内閣内務大臣着任後の平田東助等によって推進された地方改良運動以後のものと考えられる。またこの直後、「斯う云ふ浅猿しい言動を見聞きするがつらさに」外へ出た静子が「誦し馴れた晶子女史の歌」として「秋の風来たる十方玲瓏に空と山野と人と水とに」（第 47 卷、109 頁）という『舞姫』（如山堂、1906.1）収録歌を想起していることから、小説の時代背景は明治 40 年代初頭と推定される。一般に大正期に入ると教師の給与は上昇し、女性教員も増加したとされているが（村上信彦（4））、静子は妹との生活を「僅か十六円の俸給で」（第 35 卷、121 頁）やりくりしており、小学校校長をつとめる伯父の給料も伯母の口から『（…）真箇小学校の先生なんて馬鹿々々しい職業ね、あんなに働いてわづか五十円ぢやありませんか』（第 39 卷、95 頁）と難じられている。静子の教員生活は「寝ても醒めても休息時としては無かつた」とされ、彼女は「学校では生徒と同僚と校長と父兄に対する心遣ひと勤務」、家では「妹に対する慰安と自分ら二人の身の上の考慮」、さらに「世間のひまな人々が、職業を持つ若い女である処の自分等を見る光つた眼と五月蠅い口」（第 43 卷、132 頁）に悩まされている。

最終的に静子は噂となった男性から求婚されており、微温的な展開ではあるが、同時代の『青鞥』における女性教師表象にも共通する「苦悩」（米村みゆき（5））が描かれていたとも言えよう。さらに、『台湾愛国婦人』誌上ではこの「女教師」終了後に尾島菊子「幼きころ」（第 52 卷～第 73 卷、1913.5～1914.12）の連載が開始された。「幼きころ」は父の犯した罪によって数々の理不尽な出来事に見舞われながらも零落した家を背負い、母や幼い弟妹を養うため、最終的には書くことによって自活の道を得ようと決意するまでの女性の半生記である。すなわち、雑誌は女性の手になる女性の自立をめぐる苦闘を描く長編小説を連続して掲載し、読者に提供している。

その他のユカシの文芸創作としては第 14 卷（1910.1）の附録小説「春の家」がある。ごく短い読み切り小説であるが、〈内地〉から台湾へ移住し、二度目のお正月を迎えようとする日本人家庭の様子が描かれて

いる。登場する夫婦は〈内地〉の気候に比して「台湾の歳暮はまるで春」「梅のあたたかさ」（153 頁）だとの実感を口にし、それがタイトルにも反映されている。小説末尾では正月に『生蕃の小父様が入来しやる』ことがわかり、子供たちが喜び騒ぎ出す。「生蕃の小父さんとは主人の弟の清治」のことで「昨年の九月頃に自ら仕願して警察官吏と成り、当時討伐隊に交じって征蕃の為に働いてみた」（159 頁）という。この人物設定は明らかに台湾総督府の「理蕃」政策の後援を「一大任務」（6）とする愛国婦人会台湾支部の役割を踏まえたものである。実際にはこの「小父さん」は他の人物の会話中に登場するだけであり、ごく表面的な扱いに過ぎないが、いち早く会（雑誌）の趣旨を踏まえる台湾表象を小説に試みたユカシの対応力には一目置くべきものがあろう。

二 台湾における見聞記

『台湾愛国婦人』においてユカシは文芸創作の他に、台湾在住者であることを生かした、多くの見聞記を書いている。最初の取材先は第一尋常高等小学校（「台北の三小学校」第 16 巻～第 18 巻、1910.3～5）であるが、そこでは極めて細かな観察と忌憚のない批評が行われている。たとえば、一年生女兒のクラスを受け持つ若い女性教員については「失礼な申分ながらまだく隙がある、つまり不慣れでいらつしやるのだらう」（第 18 巻、101 頁）とし、他の教師についても「松平定信の歴史用掛図に見えた冠物の説明が不充分」（103 頁）といった授業進行上の具体的な指摘があり、最終的には八つの教場を参観した上で「格別、本校の特色と伺つた言語の研究の結果を実際に伺ふことが出来かねたのは返すぐも残念でございました」（105 頁）と皮肉にも受けとれる文章で結ばれている。

実は、台湾へ渡る以前のユカシには既に学校訪問記（「高等附属小学校参観記」『家庭雑誌』1908.7）の執筆経験があり、また「花散る家」（『家庭雑誌』1908.5）、「追懐記」（『家庭雑誌』1909.1）、或いは先に確認した小説「女教師」の内容からも、ユカシには小学校教員の前歴があると見てまず間違いない。新天地・台湾においても訪問先の嚆矢として小学校が選ばれた所以であろう。

その後は新起街市場（「台北の市場」第 24 巻、1910.11）、淡水戯館（「淡水戯館の一夜」第 38 巻、1912.1）、林本源家（「枋橋ゆき」第 38 巻、1912.1）、台北医院（「台北医院」第 39 巻、1912.2）、北投温泉（「浴泉記」第 51 巻、1913.2）、基隆埠頭（「船の出る日」第 54 巻、1913.5）など台北を中心として各所へ訪問し、その様子を書き留めている。

ユカシは質実を宗とする人物であり、台北在住女性の華美な装いについては批判的である（「いかに粗品なりとも絹布でなければ人中に出られぬかのやうに、或は思つてゐる人が無いでもない台北……の華美……（或は其れ丈けの服装をせねばならぬ地位の方のみあらせらるゝ処なのかも知れませぬが―）兎に角内地から初めて来た人人が争つて口にする其ぜいたくな台北」（「奮闘主義の婦人」第 32 巻、1911.7、43 頁）。逆に質素堅実な女性を取り上げ、称揚する傾向にある（「台湾では一二と指折らるゝ夫君のお名の下ならば、如何な贅沢も御自由である身をいつも乍ら極めて質素な御服装。平民的な態度の其中にも清げな貴婦人の面影が躍如としてゐる夫人」（「台北医院」第 39 巻、41 頁）。〈内地〉に比して台北の人々の生活水準が一定以上であることへの言及も多い（「子供を負つた女房さん風の婦人迄が風呂敷一ぱいの買物をして行く所をみると何といつても台北はまだ／＼太平なもの。東京ではお米が買へなくつて……お粥が啜れなくつて、一

日に五銭の焼芋で家内五人が凌いだといふ話もあるに」(「白木と三越」第42巻、1912.5、63～64頁)、「日常生活の裡から放逐された『敗残の人』の姿はみることが出来なかつた。いつれの人の顔にもしてもどこかに余裕が見えた」(「新公園のかはたれ」第42巻、151頁)。

また、林献堂氏宅で昼食を御馳走になった際には、食べ慣れない料理のため、「モサ／＼と口中に溜つてどうしても咽喉を越さない」「一口咽喉を越させるとヤレ／＼一口はすんだと思ひ、念じるやうに」「茶碗の三分の一を済ました頃は、他の婦人連大方平げ盡してゐた」(「台中まで」第27巻、1911.2、132頁)といった、いささか滑稽な様子も包み隠さず記している。他にも「私共は台北近郊の遊樂地として、大俗地になりかゝつてゐる北投より感じの散漫な水源地より、はた変化に乏しい圓山公園より、未完成の新公園よりも、一番此処が好きである」(「初夏の苗圃」第55巻、42頁)と、あくまでユカシは自身の実感に基づいた率直な感想を記す。『台湾愛国婦人』は無署名の「女記者」による訪問記も度々掲載しているが、そこでは取材対象者の発言の記録が主である。一方、ユカシの署名記事はより自由で主観的であるため、読者はユカシの目に映った台湾風景のみならず、ユカシ自身の価値観やその変化をも認識することができる。たとえば、渡台後、初めて台湾で新年を迎えた彼女の記事には「正月早々何だか腹が立つのは本島人の店がお正月らしくしてゐない事である」(「台北の正月」第26巻、1911.1、126頁)といった、あくまでも〈内地〉を基準とした価値判断、台湾文化への不理解が見られる。ところが、それから二年後、温泉地で路傍の「樹蔭には湯川にひたる男の裸体姿が幾つもみられた」際に、他の日本人と次のような会話がなされている。

『まるで原人をみるやうだ。』

『人間もあゝした処はあんまり奇麗なものでもありませんね。』

『日本人も生蕃のことは余り笑へません。』

三人は面を背けて通つて行つた。(「浴泉記」第51巻、1913.2、82頁。下線は発表者、以下同様)さらに、雑誌の最終巻(「つれ／＼日記」第88巻、1916.3)には「内地人」が「土人の辮髪を掴んで曳きずつて」「横頬を厭と云ふ程、打擲した」光景を目にし、「胸が痛くなつて其蹣跚とした哀れむべき土人の姿を正視するに忍びなかつた」こと、「内地人の憤怒の顔容を思ひ浮べて何と云ふ暴戾さであらうと嘲り悪んだ」こと、さらには「もしこの土人が内地人に代つたとしてみやう。そして強い男だつたとしてみやう。果して彼の男は打擲したらうか。弱い者いぢめは野蛮時代の遺風である。ことに植民地ではお互の品位を高めて、真に優良な地位を辱しめぬ様にせねばならぬ筈であるのに」(34～35頁)と記している。依然として日本人を優位とする思考の範疇にはあるものの、植民者である自身(たち)を振り返る目はさすがに厳しくなつたと言えようか。

『台湾愛国婦人』は〈内地〉在住の著名な文化人・作家による多くの寄稿が目を引く媒体であるが、その中でユカシの記事は台湾発刊の女性雑誌としてのローカリティ、オリジナリティ、リアリティを担保するものとして機能している。

三 〈内地〉雑誌に伍する

では、なぜユカシは台湾で新たに刊行された雑誌において、他の女性記者とは異なり、署名入りの記事を毎号のように発表することができたのか。その理由は二点考えられる。まず一つには、彼女が渡台前、既に

投書家、女性雑誌の記者としてのキャリアを積んでいたことがあげられよう。実際、その事実を示すかのように、『台湾愛国婦人』第43巻（1912.6）には「本誌の加納ゆかし様と仰有るのは二三年前女学世界や家庭雑誌に書いていらした同姓同名のお方とはちがひますか（東京の白露）」（174頁）という読者からの問い合わせもある。また、『台湾愛国婦人』第4巻（1909.3）掲載のユカシの少女小説「おはなれの灯」が『少女の友』に剽窃されるという出来事も発生しており、それは読者による次の投書によって明らかにされた。

▲昨年九月五日発行の少女の友に載つて居る湯原義子様の小説お離れの灯は一昨年三月貴誌に載つて居た加納ゆかし様の小説おはなれの灯にそつくり其儘です他人様のものを窃んで我物顔する湯原といふ方は何といふ浅ましい人でせう（東京鹿島初子）（「婦人倶楽部・談話室」『台湾愛国婦人』第27巻、1911.2、108～109頁）

この投稿に対し、ユカシは「御深切にありがとうございます。私も知らないではありませんでした」と回答し、「一字二字、小説中の姓を変へた計りで、趣向も筆の行り方も微塵違はぬ、殊に題さへも其儘な彼作をば、同誌に於て拝見した時、世には不思議な心を持つた人もあればあるもの、否、不思議な事があればあるものと思ふと共に、麗々しく其を載せた人々の心持も計り兼ねた事でありました」（109頁）としている。その二ヶ月後には「小説 おはなれの灯に就て」と題したユカシの文章が読者通信欄に掲げられ、「少女の友編輯主任星野水裏先生に御答へ致します」「今回は拙稿おはなれの灯につきわざ／＼長文の御手紙を頂きまして難有御礼申上ます」とした上で次のように続けられた。

なるほど堂々たる少女の友の記者先生が台湾の田舎から出る微々たる本誌如きを一一お目通し遊ばさぬは御尤ものことですよし御覧になつたとしても剽窃と知り乍ら御載せになる道理もなし致しますから、本誌第二十七巻に掲載しました文が御気に障りましたらば御ゆるしを願ひます。但し、茲に一言お断り致して置きますが、「そをのせた人の心持も計りかねたことでした」と申すのは、「そをのせた人の御心持はどうあらうか」と自ら疑つたに過ぎないので、「少女の友記者の心中如何」と詰問したのとは聊か意味がちがひます。随つて、相当の考を述よと仰られましても、これは応ずべき筋であるまいかと存ますが如何で御座いませう。（「倶楽部・談話室」第29巻、1911.4、144頁）

「堂々たる少女の友の記者先生」「台湾の田舎から出る微々たる本誌如き」と皮肉を込めた文章を誌面で公にし、ユカシは星野水裏に応酬した。残念ながら、ユカシの「おはなれの灯」が掲載された『台湾愛国婦人』第4巻は未発見巻のため、剽窃の詳細を検証することができない。が、『少女の友』には確かに該当小説の掲載があり、何より編集主任・星野水裏が弁明（反駁）の書簡をユカシへ出していることから、盗用はまず間違いない事実と見なされよう。ちなみに「お離れの灯」は婚家から戻されて、離れの間で肺病に伏せていた姉の短刀自殺を幼い妹の立場から語ったものである。肺病・出戻り・継子・「片輪」・「不具」といった同時代における典型的な不幸の形象を姉の一身に担わせている点はやや過剰に感じられるものの、少女小説としてはそつのない構成と内容である。先に確認したユカシの創作とも一脈通じる「少女不幸物語」であり、彼女の創作が〈内地〉の一流商業雑誌に掲載されうるような水準にあったことが剽窃によって逆に証明されているとも言える。

ユカシが『台湾愛国婦人』の記者として活躍の場を得た第二の理由としては、同誌編集主任・加納豊（1885-1932）の存在があげられる（7）。おそらく親戚関係にあると考えられるユカシと豊は、台湾へ渡る直前ま

で『家庭雑誌』（主幹・和田勝彌、家庭雑誌社）において共に寄稿・編集を行っていた。二人とも『台湾愛国婦人』創刊翌年の1909年の初めに台湾へ渡ったと見なされ、その〈協同〉の働きは〈外地〉の雑誌編集においても継続されたのである。『台湾愛国婦人』誌上では編集部による、次のような〈内地〉雑誌に対する批評も行われた。

（※字数制限のため、引用省略）

この「九月の婦人雑誌合評」では、海川野山の発言者四人が簡単に各雑誌の印象を述べ合っているが、なかにはかなり辛辣な評も含まれている。同誌編集部の人員を見る限り、海川野山の内の二人はユカシと豊であろう。〈外地〉の女性団体機関誌である『台湾愛国婦人』が〈内地〉の商業女性雑誌を俎上に載せるという行為は、一般に考えられる雑誌の性格やヒエラルヒーを覆すかのような挑戦的行為とも言える。しかし、実際には『台湾愛国婦人』は創刊から二年後には広告を含めて三百頁を擁し、同時代の商業雑誌に比して何ら遜色のない充実した誌面を実現しつつあった。それを可能にしたのは、何より愛国婦人会台湾支部の後ろ盾である台湾総督府の潤沢な資金力に他ならない。ユカシも豊もその資金力によって雇われた身であった。ただし、〈内地〉で一通りの雑誌編集に通じ、〈内地〉の雑誌にも伍する意識や筆力を持っていたユカシや豊のような存在があってこそ、『台湾愛国婦人』は現在我々が見ることのできるかたちで編まれえたとも言える。同誌は官製プロパガンダ誌であるとともに文芸総合雑誌の貌を持ち、かつ在台日本人の寄稿の場合＝〈外地〉の「文化的基盤」（日比嘉高（8））としても機能した媒体であった。ユカシは、この媒体の複合的な性格のいずれにも関わる重要な執筆者であったと位置づけられよう。

注（1）「台湾支部本部職員」名簿（大橋捨三郎『愛国婦人会台湾本部沿革誌』愛国婦人会台湾本部、1941.2）、731頁参照

（2）『台湾愛国婦人』（1908.10～1916.3）の基本情報については拙稿「雑誌『台湾愛国婦人』の性格—プロパガンダ、そして近代文学発生の場として—」（『県立広島大学人間文化学部紀要』第5号、2010.2）参照

（3）菅聡子『〈少女小説〉ワンダーランド—明治から平成まで』（明治書院、2008.7）には、「教訓物語の代表は『少女不幸物語』です。これは、その名のとおり、かわいそうな少女が実母と別れてさんざん苦勞するお話。母や家から離れると、こんなに大変なんだぞ、と読者をおどし、普通の家庭生活に感謝させ、その大切さを教える効果があったと言われています」（9頁）という説明を行っている。

（4）村上信彦『大正期の職業婦人』（ドメス出版、1983.11）は「小学教師」について「明治三十年後に増勢に転じた女教員はその後増えつづける一方で、大正初年には四万三十四人、全教員の二七・三%を占めるに至った。教師の四人に一人強が女教師になった」（91頁）とし、「大正十三年の東京市社会局の調査」として教師の平均賃金は「六七円二三銭」（78頁）と記している。

（5）米村みゆき「〈女教師〉という想像力——『青鞥』を醸成する〈ローカル・インテリ〉」では、『女学世界』における小学校教師の表象とは対照的に『『青鞥』の女教師は、あたかも判で押したかのように、苦悩を抱えているようだ」と指摘されている（飯田祐子編著『『青鞥』という場——文学・ジェンダー・〈新しい女〉』森話社、2002.4、235頁）。

（6）小説「春の家」掲載の第14巻巻頭には「愛国婦人会台湾支部の既往と将来」という見開き二頁の文

章が置かれており、「我台湾支部」の「一大任務」として「本島の三分の二に占居せる生蕃の討伐に従事する隘線上の戦士の負傷者及び遺族を救護するの任あり」と記されている。

(7) 加納豊については拙稿「『虞美人草』の先へー『台湾愛国婦人』掲載・加納抱夢「夢」の表象ー」(『日本近代文学』第103集、2020.11)、『台湾愛国婦人』編集者・加納豊の台湾以前／以後ー『芦田均日記』を補助線にー(『国文学攷』第251号、2021.12)刊行予定参照

(8) 日比嘉高『ジャパニーズ・アメリカ 移民文学・出版文化・収容所』(新曜社、2014.2)、17頁